怪盗 ルピンの正体

川路　新吉

怪盗 ルピンの正体

　怪盗ルピンからの挑戦状が警察に届いたのは万博が始まる一週間ほど前だった。
『万博開催期間中に冥王星の石をいただく』
　冥王星の石とは、去年の夏、人々に感動を与えつつ帰還した無人ロケット「うみねこ」が８年の歳月をかけて地球へ持ち帰ったものだ。今回の万博の目玉として会場に展示されている。「うみねこ」の勇姿はメディアでさんざん報道されたため人々の関心も高い。盗まれるわけにはいかない。盗まれることは、すなわち万博の失敗をも意味する。
　しかし、どうしたものか。警備担当責任者の警部は頭を抱えていた。
　怪盗ルピンは凄腕の泥棒。これまで幾度も煮え湯を飲まされ続けてきた。毎回、ご丁寧に送られてくる挑戦状に合わせて警備を手厚くしているにも関わらず、ルピンはそれをかいくぐってきた。しかも挑戦状に嘘が書かれていた事は今までない。これまでは完全なる警察側の敗北の連続だった。
　怪盗ルピンの情報といえば、男性であること、犯行が過去２０年にわたって行われていることからおそらく中年であろうということ、そして、偶然にも前回の犯行時に防犯カメラに写った顔写真だけだ。しかし、毎回変装してあらわれるため、顔写真はあまりあてにならない。
「はあ」
　警部はため息をついた。これまで怪盗ルピンの事件で責任者をしてきた先輩刑事たちの顔が浮かぶ。彼らは責任を取らされ左遷や降格させられていた。
　対策室に見知らぬ人物が部下の警部に連れられて入ってきたのは、そんなふうに警部が弱気になっていたときだった。
　部下の紹介では、その人物はある研究所の研究員とのことだった。研究員は持っていたカバンを開け、何かを取り出し警部の方に差し出した。
「こちらを御覧ください」
　それは、一見するとすこし大きめのブローチのようなものだった。
「この装置は、私どもの研究所で開発した顔認証システムを改造したものです。普段は入室管理などに使っているものを、今回の環境に合わせて調整し、小型化しました」
「顔認証システムですか」
「ただの顔認証システムではありません。このシステムは独自のアルゴリズムを採用し対象者がどんなに変装していてもその顔を認証、つまりは見破ることができます。」
「しかし、こんなに小さくても大丈夫なのですか？」
「ええもちろん。試してみますか？」
　研究員はカチャカチャと手元のノートパソコンを操作し始めた。警部の顔で使ってデモンストレーションを行うという。警部がそのブローチ大の装置をじっと見つめていると、研究者のノートパソコンからピピッと音がした。画面を見ると警部の顔写真の横にでかでかと「OK」の文字が見える。成功したようだ。
「怪盗ルピンのデータは大丈夫なのですか？」

「ええ、前回得られた顔写真があるそうですね。先ほど拝見させてもらったのですが、データとしては充分です」
「なるほど、機能の方は大丈夫そうだ。数はどれぐらい準備できるのですか」
「１０００、いや２０００は準備できるでしょう」
　２０００台。十分な数だ。それだけあれば、会場のいたる所に設置できる。今回こそ怪盗ルピンを逮捕できるかも知れない。
　しかし、そこでそれまで自信満々だった研究員の顔が少し曇った。
「ただし、正確に判定するには条件が一つあるんです」
「条件？いったいそれは？」
「この装置は、虹彩認証を根幹のシステムとして採用しています。瞳の中にある虹彩のパターンは２歳を迎えるころからほとんど変化しないことが知られています。だから、変装などしていても関係ないわけです。しかし、逆に言えば虹彩をきちんとカメラでとらえることが出来なければ判定はうまくできません」
「つまりはどういうことです」
「判定対象にカメラ目線になってもらう必要があります」
　防犯カメラに対してカメラ目線になってもらう。その条件はかなり難点とも言えた。あからさまに防犯カメラを設置してしまっては相手を警戒させるだけだ。防犯カメラはできるだけ隠して設置したい。が、それでは目線をとることは難しい。
　しかし、警部は言った。
「なんだ、その程度のことですか。それならば大丈夫です。任せて下さい」
　ご協力ありがとうございます、しかしできるだけ極秘でことに当たりたいので、と研究員を帰すと、警部は部下にむかって言った。
「急いで、万博の衣装担当を呼んできてくれ」

　万博が開催されて数日経ったある日、新聞の一面に『怪盗ルピン逮捕』の文字が踊った。装置を提供した研究所にも警察からお礼がしたいとの連絡が入った。
　研究員が対策室に入ると、警部は満面の笑みで出迎えた。
「先生ありがとうございました。お陰でにっくき怪盗ルピンを逮捕できました」
　二人は固い握手を交わした。
「逮捕おめでとうございます。こちらこそお力になれて光栄です。しかし、いったいどんな手を使ったのですか？」
「こういうわけです。おーい連れてきてくれ」
　部下の刑事が連れてきたのは、万博会場で案内をしていると思われるコンパニオンだった。
　注目すべきはその制服だ。万博会場にふさわしくないほど胸元がざっくりとあいている。男性ならば誰もがくぎづけになってしまう、女性ならば誰もが眉をひそめてしまうだろう衣装だった。
　研究員が目のやり場に困っていると、警部があそこです、と指を指した。

　その指の先、コンパニオンのあらわになった胸元のちょっと上、鎖骨の少し下ぐらいに、ペンダントのようにチェーンにぶら下がって例の装置があった。
「なるほどこういうことですか」
「ええ、男ならば誰だってついつい見てしまうものでしょう。案の定大成功でしたよ。まあ、コンパニオンたちには大不評の作戦でしたけどね」
　ガッハッハと警部の下卑た笑いがこだました。
「しかし、こういうのも何ですけど、なんか残念ですね。怪盗ルピンがこんな罠にはまってしまうなんて」
　研究員はすこし残念そうに言った。
　それを受けて警部が誇らしげに言った。
「怪盗ルピンも我々と同じ、ただのオジサンだったってことですよ」

怪盗 ルピンの正体

http://p.booklog.jp/book/39010

著者 : 川路　新吉
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/bowmoq/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/39010

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/39010

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.